
オレとメイドと異常な日常

とびUO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オレとメイドと異常な日常

【Nコード】

N7272E

【作者名】

とびうお

【あらすじ】

オレは至って平凡に生活してきた、ソレに不満も変化も求めたりはしてなかった。なのに、突然オレに降り掛かった災難！「ご主人様、アナタを守ります」こうしてやって来た超絶美少女メイドによってオレの日常は非日常へと誘われた。「頼むから返してくれよ！オレの平穏な日々！！カムバック！」常識なのはオレだけなんですよっか？

プロローグ（前書き）

この展開は無理があるだろう！…と言っっっコミは痛いのでお止め
ください

プロローグ

『お願い、置いていかないで!』

いつもその背中を眺めていた。心から貴方を尊敬し、誇りだったから

『私、強くなる!』

もう守られないように……貴方を守るようにっ! だから、私を待
つていて!! 必ず行くからっ』

『見つけてみせるから』

泣きじゃくった私は追いかける事を諦めて、それでもこの声だけは
届いてほしいと叫んだら、貴方はゆっくり振り返り優しく笑っただ
けだった

それをどのように受け止めてくれたのか、その時の私には理解なん
て出来るはずもなく、ただ自分がこの一方的な約束を果たそうと必
死で何も見えなくなっていたの

待っていて……

どんなに時間が過ぎたとしても、貴方を見つけてみせるから……そ
して今度は、私が守ってあげるから

メイドさんがやって来た

「お帰りなさいませ。ご主人様」

今日は誕生日と言うことで友人が祝ってくれたのと、明日が日曜ということが重なり、かなり上機嫌だったオレ。浮き足立って家に帰り、玄関のドアを開けると、そこには絵に描いた様なメイド服の美少女が、笑顔でオレを出迎えた

バタンッ

オレは思わず開けたままの扉を閉め直し、門まで戻って改めて自分の家の外観を見直す。上から下までじっくり眺め、当惑しながらも自分自身に確認する

「オレん家……だよ、な？」

正真正銘、17年暮らした我が家に相違なく、家族は父・母・そしてオレの3人家族

あんなメイドコスプレ美少女の親戚はいないはず、覚えもない。むしろ恥だろ！？……いや、趣味は好き好きだし悪くない、アレは良

い……じゃなく！

混乱するオレは先程見たモノを幻覚と思い直し、もう一度ノヴに手を伸ばした

見間違いだよな？

ガチャ

半信半疑で開けたドアの隙間から恐る恐る覗いてみる

「どうかなさいましたか？ご主人様」

気のせいじゃなかったし！

幻覚どころか、いるし！リアルメイド

キョトンとした表情がまた可愛くて、生でお目にかかったことの無いくらいの美少女。

大きな瞳と白い肌、ふっくらしたさくらんぼ色の艶っぽい唇。割と童顔にも見える容貌は、彼女が表情を変えただけでガラリと変化し、ぐんと大人びた女の顔を作り出す。女つて怖え〜。

スラツと伸びた細長い手足、ミニのメイド服は目のやり場にかなり困る。

だって、服の下の抜群のスタイルと大きく形の良いでかい乳！下も上も目の毒でしかない！！……嬉しいさ、オレも男だ、それは認める

「(ヤバイ…まじタイプ　　って、違あーうー!!) そうじゃなく
てっ　なんだ、アンタ?!」

我に返ったオレは理性と本能に振り回されながらなんとか質問を投げ掛けられた

そんなオレの苦勞を知ってか知らずか、目の前のメイドは笑ったままアッサリ告げた

「私は貴方を守る為に来ました。どうか私を手足の様に扱って下さって結構です。この命、爪の先…髪の毛一本まで貴方の物。この身、全てを懸けます。

ご主人様」

ふくよかな胸を揺らし、黒い竹箒を持った美少女メイドは当然のようにオレに頭を下げるのだった

「　　はい?」

メイドさんがやって来た(後書き)

逃げずをお願いします…

オレの話も少しは聞いてくれ

髪の毛一本？……………

「ご、ご主人って…オレ？」

「はい」

この女は何言ってるんだ？

「守る？」

「はい。貴方です、ご主人様」

真面目な顔してバカにでもされてるのか？

「あ、あのさ、意味分かんないけど……………オレ、未成年者だからそういう店を頼んだ覚えは……………」

「まずは、お疲れでしょう？ご飯にします？それともお風呂にしますか？」

オレの話が終わるより先に、メイドはニコやかに質問してきて、その姿はあまりにも愛らしくて、ついつい流されてしまう

「あ、じゃあお風呂で（ン？）…って違あーうー！おかしつつ おかしい！だからおかしいだろ？！

泥棒か？！そうなのか？！新手の泥棒は、昨今相手を喜ばす趣向なのか？！…………いや、落ち着け、オレ！

とーにーかーく、出てけ！」

「何故でしょう」

間髪入れずに返された質問に頭痛を覚えた

「お前、オレをバカにしてる!？」

心底不思議そうにする相手に、常識を訴える自分自身が馬鹿馬鹿しかった

「怒ってらっしゃるのですか?ご主人様」

オレを見つめながらソレを確認されたら、もっとう対処したら良いのか困惑する

(待て待て待て!)

大きく息を吐く

冷静に考える、常識的に考えれば済む!……話のはずだ

(この家は今、オレ一人だ。そしてコイツはメイド。自分で名乗ってたし!……ドコから見てもメイド……少し目の保養にもなる……じゃなくて、メイドはお手伝いさんとも言える。そっか!母さんが雇ったのかも!……)

現在、両親は愛する息子を置いて仲良くラブ旅行三泊四日北海道の旅!……に出ていて帰ってくるのは明日の予定だ

オレは結論を出して何とか強引に脳を納得させようと試みる

「お前！母さんが雇ったハウスキーパーだろう?!」

「違います」

直球で否定されちゃったー 笑顔で

このカー杯に伸ばされた指はどうしたら良いのかな？

「あ…違うのね？」

出鼻を挫かれ、力が抜けたように持ち上げられたままの指を手持ちぶさたに下ろして頂垂れた

「ご主人様のご両親とは面識ございません」

「じゃ、じゃあ何なのさ？突然現れて、何の用なんだ?!」

「だから貴方を守る為に…」

「はい！ちよつとストップ」

それは何度も聞いたし、何度もリピートされても困るので、ソッコ
ー遮った

オレは全力で考えを巡らす。普段だってこんなに考えたことないぞ、
オレ

メイドは俺に言われた通りに黙って次の言葉を待っている。メイド

と言っただけあって忠実だった

暫くして、ようやく考えがまとまったオレは顔を上げてメイドの肩に手を置いた

「（よし！コレでいこう！）えー…と、取り敢えず一度玄関の外に出てくれる？冷静に話し合おう」

オレは極めて冷静を装って告げた。するとメイドもオレの表情に緩みが見えたとも思ったのか、パアアアと目を輝かせ大きく頷いた

「はい！私は極めて冷静ですが、ご主人様の御言葉のままに」

ははは、オレはパニックし過ぎて冷静さを取り戻したよ…

その笑顔がまた、眩しいやら可愛いやら綺麗やら……ってソレはちよつと置いといて。

疑いもせず言われるままに、素直にオレに従ったメイドはオレ自ら開けた玄関のドアから一步外に出ていつて…

「よっしやー！…」

オレは勝った！と、ガッツポーズを後回しに、マツハでドアを勢い良く閉めると同時にチェーンを掛け鍵を締めた

この間、5秒とかかってはいまい。我ながら見事な早業だったと感心する

（よしっ 変な女メイドは撃退した。警察が来てくれても待つ間オレがどうにかされちゃってたらシャレにならないしな。取り敢えず

これでオレの身の安全は保障された！)

全身でホッと胸を撫で下ろして安心し、メイドの事は悪い夢でも見たと思つて忘れようと心に決めて、二階の自室に歩きだした

閉め出した事ですっかり安心だと思つてたしね

「ったく、せつかくの良い気分を台無しにしすぎてくれて…あのメイドめ……可愛いからつて限度を軽く通り越してたぞ。

あーあ、風呂にでも入つて気分でも直そ…」

ガチャ

「。。」

「お疲れさまです。ご主人様」

そこにはメイドがおりました

極めてオレの考えは甘かったのです…

「出ターッ!!」
「」

オレの話も少しは聞いてくれ（後書き）

主人公は怒鳴り通しですね。これからも変わりません

お前は忍者か、人間か？（前書き）

メイドです

ハイ！メイド

お前は忍者か、人間か？

「ひギヤアアアアッつ 出たー！ツツ！！？」

ドアを開けると、そこには外に閉め出したはずのメイドがオレを笑顔で出迎えた

リターンズ 恐怖？！

「おま、おま……お前、どっから湧いた？！」

この時のオレは、かなり混乱していたんだ。

だから部屋の外に逃げてれば良いものを、わざわざご丁寧に足を踏み入れてドアまでバチンと閉めていた。どうやら無意識に目の前のコイツを野放しにしたら犠牲者が出ると偽善心が生まれていたのかもしれない

いや、だってマジに怖いんだって、このメイド！

その証拠にオレは壁際に張り付いたまま彼女との距離をとっている

だって普通じゃないもん、コイツ

しかし、この行動をオレは後に心底後悔する

（玄関の鍵は確かに全部閉めたし、何より玄関から直で部屋に来たオレより先に部屋の中に待機して出迎えるコイツは何なんだ？！可

能なの？

ハッ そうかつ…そうかも、とは薄々考えてはいたが、やっぱりそんなのか?! 化け物?! 変態!?! 変態はまあ確認持つて言えるな、最初から解つてた)

などと思考を悩ませていると、メイドがオレの苦悩を知つてか知らずか、可愛らしい口を開いた

「ご主人様、お部屋の窓の鍵が開いていましたよ。無用心ですので、今後はくれぐれもお気を付けなさいませ」

「へ? 。 …鍵……?」

一瞬、彼女に注意された事を全部把握できず、ノロノロとした動作で部屋に一つしかない出窓に視線を流す

片方の窓が全開だった

「あ、ごめんなさい、わざわざどうも。 …… って、何、注意受けて素直に謝つてんだよ、おいっ ここ二階だろツ? ツーか、そこから入つたの?! おかしくねっ?」

侵入したことが? …いや、そこじゃなくて、いやいや、ソレも充分ツッコミ満載だが、今回はそこじゃなくて

一人、自問自答しながら青冷めていくオレ

イヤだ、考えたくない

(ココは二階なんだから、当然梯子を使わなきゃ登つて来れねえよ

な？でもこの短時間でそもそも上って来られる訳がない！

怖ッ！ コイツ、マジで怖！！やっぱ人間じゃないのか？！

「ご主人様」

不意にメイドはオレに声を掛けた

「はひっ」

裏返った声で返事するオレ自身が情けない

見つめてくるメイドの表情は先程とは打って変わってしおらしく、不安そうな目を向けている

「？……な、何？」

その視線は更にオレを動揺させた

「……憶えて……いらっしやらないの、ですか？」

「はい？」

何を？

お前は忍者か、人間か？（後書き）

本当は短編になるはずだった作品も、こんな長々と…（泣）（泣）

思い出す前に、死んじゃいます (前書き)

あと少し……

思い出す前に、死んじゃいます

「忘れてしまったままなのですか？」

だから、何を？

「あ、あのさ…スツゴい今更なんだけど、オレたち会ったことあったっけ？」

ホント今更な質問だ、と我ながら呆れた

「いいえ、ありません」

ねえのかよ！

この質問に少なからず期待を込めていただけに、メイドのキツパリ発言に再び眩暈がした

言いやがった！お前、そりゃねーだろーが……

一体、何が言いてーの？！

会った事ないんだろ？なら今までの発言おかしくね？

オレはゲンナリしながらメイドを睨み付けた

「じゃあ、覚えてるも忘れてるもなくていい？！バカにしてんの？」

確かにオレは勉強の成績は悪くないんだけど、頭がキレルか？と、言われたら自信は無い！

でも、これはないだろう？いじめか？苛めにあってるのか！？オレ！

「滅相ありません！ご主人様を謀るなど、絶対致しません！！」

たばかりって…

メイドは力一杯否定して真っ直ぐオレを見つめ返している。嘘を吐いている表情ではない様だが、いかんせん話が噛み合わない

「あのさ、アンタ自覚あつてやってる？（あつてやってたら、それこそ最悪ダケど…）言ってる事が支離滅裂、矛盾だらけ」

肩を竦めるオレに、メイドは何やら確信めいたように呟いた

「やはり、お忘れなのですね……」

また同じ台詞……いい加減腹が立つてきた

「だあーから、何をっ… … な、何持ってんのっ？？！」

見れば、悲しそうな表情をしたメイドの手には、絶対数十キロはあるであろう、どでかいハンマーが握られていた

オレはソレを目の当たりにして、ツッコむ事すら忘れて愕然となる

「思い出して下さい。我々の事、前世の事を…」

前世?! ソレ美味しい?

今は彼女の言動を聞いている場合じゃない

「そ、そそソレっ どーすんのかしらあ?！」

震えて自然と大きくなる声。言動も混乱に乗じて変になっても、この時のオレの心情を考えたら仕方なかった

動揺して壁に背中を張り付けて、それでも尚、無意識に後退ろうとする体は正直さんだ。ドアまで蟹歩きで辿り着いても逃げるまでの余裕はない

背中を見せたら、即！

殺さ(ヤラ)れる!!

これはオレが長年培った動物的直感……そんなものに助けられた覚えもないが、持っているのも怪しいモンだが、それでも今だけはその直感が警告音を鳴らしていた

… 逃ゲロ

(何でオレ、部屋のドア閉めちゃったんだあ?!むしろ、二人きりに部屋に閉じこもった時点でバカだ、オレえ!!外に逃げれば良かったじゃん!!)

大ッ後・悔ッツ!!

メイドの顔には笑顔が戻っている。さっき迄可愛いと思っていたソレは、今では死神にしか見えない。ニコやかにすればするほどその

恐怖心は深くなる

「ちよ…やめ……」

ハンマーを軽々振り上げるメイド

実は結構軽いのか？片手で支えてるし。…でも行為に変化があったわけじゃないのでオレの危機が変わったわけじゃないし

「大丈夫です。ご主人様」

なにが？

蒼白するオレは、これから彼女がやるうとしてしている行為を想像しながらも、片隅の何処かで、よもやそんなこと…と鷹を括っていた。そんなオレの信頼(?)を、この女は次の瞬間見事に裏切りやがったんだ

「今、思い出して差し上げます！！ご主人様っ」

「ひっ
」

ドゴォ…っッッ…！

ヒクッ

「
」

木片が飛び散り、その床にはハンマーの半分が埋まった状態にあった。オレは顔を引きつらせ、硬直しながら目を見開いてズルズルとドア伝いに崩れた

誰が軽々だつて？

(ハ…ハハ…鼻、擦った)

咄嗟に逃げ様もないその僅かなドアと自分の距離を、それこそ一心同体とならんばかりに体を押しつけて、間髪彼女からの攻撃を避けた自分に賞賛を送りたい

オレが座り込んだ股の間の破壊された床とそこに埋まるハンマー、その状態だけで攻撃の威力を物語るには充分だった。これが直撃していたら

ゾツとした

このハンマーも並みの重量でないのは一目瞭然、それを片手で振り回すこの美女は……

こんな恐怖心に襲われているオレに、この女

「あら、避けてはいけません。ご主人様」

キョトンとした様子で、さも当たり前のようにオレに言ったのだ

思わずカツとなる

「さけっ…こっ、殺す気か?!」

叫んだオレに、メイドはコロコロそれこそ可愛く笑うのだ

「イヤですわ、ご冗談を。ちよつと頭にシヨックを与える程度ですわ。コレで思い出すはずです。」

さあ、今度は避けないで下さいませっ！！」

再び振り上げられるハンマーにまたもやオレは絶叫した

「ギヤアアアアッ！」

どこがちよつとジャーーッ！！死ぬーッ！」

グワッシャッ！！

「はあ ハア ハア」

あるのは恐怖。

それ以上のものなんて無かった

ガクガク震えるオレは、自分が案外反射神経が良かったことを知る。この時のオレはそんな事を実感している暇などなかったが

今度はしゃがんだオレの頭上ギリギリにハンマーが背後のドアにめり込んでいた

(ぜつ、絶対当たったら即死っ シヨックどころか、あの世へレッツらGo?!)

「ご主人様ったら……」

さも、聞き分けのない子供に対するような目で見下ろされても、今のオレがした事は憤慨するより、逃げる事だった

めり込んだハンマーを軽々引っ込抜くメイドの隙をつき、抜かしたと思つた腰を叱咤して素早く立ち上がり、半壊したドアを開けて部屋から逃亡した

「！ お待ちなさいっ、ご主人様ー」

しかし、メイドも反応は早い。直ぐにオレを追い掛けて来る。

ハンマー持って

「ぎゃあーっ 殺されるうゝー！！」

何が怖いって、なんでこの状況で笑ってるんだよ！あの女！！

「ご主人様、何故逃げるのですか？」

「逃げないでかあーっ！！その質問が既にミステリーだっ テメエ
！！状況考えろ！！」

追われてんだよっ、オレは！口も荒れる

なのに、追い掛け回す方は難のその

「ご主人様つたらダンディーですね ユーモラス抜群ですよ。

ほほほ、このような重さでご主人様がどうにかなるわけはないですよ
？」

ドゴオッ

「カベ…一応コンクリで出来た壁…そんな所に軽々穴掘つといて、どんな解釈だよ！全然説得力無し！それで死ななかつたら、それこそオレが化け物だ！…死ぬ、絶対死ぬ！」イヤだあー！殺されるうゝ、メイドに殺されるうゝっ！！」

情けないなんて言っつてられなかった。嘆きながら階段を駆け下りるオレ！
と……？

階段を軽やかに えゝ…と 飛び下りる
…メイドオ???!

オレは一瞬、驚きで足を止めて彼女の一挙一動を見守ってしまった
なんと、メイドは階段の最上部から飛び下りる（上がる？）と、駆け下りていたオレの頭上を2回転して…

（ウソ…）

スタッ 10・00 満点
美しいフォームで一階に着地

（うん、見事な運動神経だ。スカートから覗いたレースの脚線美のガーターベルトがセクシーで……って、見惚れている場合じゃない！

鼻血モンな状況に喜んでる間に、追い詰められたあつ 絶対絶命
ッ こいつこそ地球外生命体！ああ…さよなら、オレ…！）

落ち着いて考えてみると、オレもとことんアホなんだな…何やって
んだよ！オレ…っ

ここはもう覚悟を決めて…

…っ、んな訳あるかあー！！

待ち受けるハンマー片手のメイドさん。追い詰められたオレ

でも、もう自棄だ、諦めてたまっかよ！

野球バットのようにハンマーを構えるメイドにオレは突進を試みる

「うおおー！！」

階段を一気に駆け下りる

その入り口に仁王立ちのメイド、その目は爛々輝いている

「必ず的中させます！待っていて下さい。さあ…！！」

「さあ「じゃねーっ 死ぬっつーの！

気合い入れてんじゃねーよ…！！

打たれる直前、オレはその一撃を辛うじて避け、メイドの横を擦り

抜ける

(やった！このまま外へっ！)

「あっ…ダメッ

お待ち下さいっ ご主人様！いけませんっ、外は……っ」

慌てた様子のメイドの声を背中に受けて

(誰が止まるか！！外で警察に突き出してやるっ)

高笑いを抑えて玄関の扉から外へ脱出

「やった！今度こそ…っ」

思い出す前に、死んじゃいます (後書き)

実は隠してたんですが、コレはファンタジー要素の含まれるスペクタクルストーリーだったので。

メイドさん、どちらが本性なんですか？（前書き）

完全、現実無視してます！シリアスチックです。コメディは難しいですな……奥が深いですよ。

メイドさん、どちらが本性なんですか？

完全に油断していたと言われたら、そうなるか？

外へ飛び出したオレに、メイドは後ろからタツクルかましやがって

「うぎゃっ」

見事に地面にダイビングした。オレは痛みと衝撃におかしな呻きをあげる

お前、オレのこの綺麗な顔に一生残る傷が付いたらどうすんのさ！
！お媚に行けないでシヨ！……と、虚しい冗談を言ってる場合じゃ
なかった、痛みに感傷してる暇はないんだよ！

(しまったあぁっ！捕まった！……ん？)

腰に…

メイドはオレに跨がり、柔らかい尻の感触が腰に！

「(ひいっ)ドコ乗っちゃってんのっ あんた！」

馬乗りにされて、慌てるのがオレってのもどーよ。っーか、男としてこの状況は嬉しいはずなのに、今は逃げる方が重大で。動揺しまくるオレは情けないやら滑稽やらである

背中に乗っかるメイドの姿は見えないが、何やら腕を振り回している

「（ハンマー？！ハンマーを打ち振る用意か！？準備OKなのか？！）ちよっ… 待て！！！」

姿が見えない事で恐怖心が更に深くなる

オレはジタバタ必死に藻掻いて、うつ伏せの状態から何とか仰向けになる。

これで敵に背中を見せる…という状況からは脱退出来た、が正面になっただけで何ら状況は変わってないのさ（泣）

辺りはすっかり日が暮れて真っ暗になっている。

考えてみたら、家の中での攻防戦は余裕が無かったせいもあり、電気を点けない暗い中で行われていたわけで…

逃げるのが精一杯だったんだよ！悪いーか！！

メイドの服は、定番の白エプロンに黒のワンピースのツートーンカラー。だからこそ彼女の白い肌だけが夜の闇にボンヤリ浮かび上がり、やけに妖艶な色っぽさを醸し出して、一瞬だけその存在感に息を呑んだ

自分を見下ろす無感情な視線は何を映しているのか？オレか？…でも、明らかにさっき迄の彼女の雰囲気とは別人に思えたんだ

今までで一番冷めた美しい瞳に目を奪われてしまったのは、彼女の本質を垣間見たからか？

…まるで別人

何度も繰り返し返す中、別の所へ注意が逸れたのは、彼女を見つめる中でその背景が移り込んだから

この時のオレ、上に跨るメイドの位置が仰向けになったオレの部位にジャストフィット（殴）だとか、その感触を堪能しようとか…そんな事はどうでも良くなるくらいに意識が一つに集中していた。彼女が持っているはずのハンマーは何時の間にもやら、当初に見た、あの黒い竹箒が握られていた

オレに跨り片手で勇ましく箒を振り仰ぐメイド…異様だ。変だよ、オレじゃなくてもツツコミたくなるぞ

美人だから許されているんだろうか？

いや、美人でもなんでも変態行為に良いも悪いもあるか！！

先ず、オレに乗ってる時点で間違いを正さねば！

ポタッ

そんなくだらない事を真剣に考えていたとき、上から顔に冷たい雫が滴れてきた

（何か…落ちて…）

ポタ　ポタ　ポタ…

「？」

よく見れば、ソレは見下ろす彼女の顔から顎を伝って落ちているよ
うだ

小さい顔だけに細い顎だな……

(?……汗?)

その雫の在処を訝しみながらも視線は落ち着き無く、辺りを廻って
いた

オレの中では無意識に興味深かったのか、視線は箒で止まる

上から下まで漆黒の珍しい竹箒。掃け留めに赤い大きめの鈴がつい
ている

(鈴……だよな?)

自分に確認してしまったのは、見た目は確かに鈴なのに、一度も鳴
らないのだ。特有な澄んだ音色が未だ聞こえてこない

そう思うと更に箒への興味が深まって、マジマジと見つめた

(あ、れ……?その箒……何か変じゃありません?)

ずっと持っていた違和感。ソレが何なのか判らないでいたが今にな
って解けてくる

(やっぱ変だよ、アレ……不必要に黒光りしてて、特に箒の先なんて
……まるで　　まるで、鋭利な針千本?!アイスピックの先がイ

ツパイみたいなんですがぁ
ね ネ?) あんなんでゴミは集められないよ

現実逃避したくなるオレの気持ちも考えてくれよ!

だって最初見た時は確かに黒くて変な筭だなんて思いはしたけど、
あんなんじゃないかったって!ただの竹筭だったよ!

それに… 先端^{サキ}っぽに何か刺さってるし…

掃くどころか、アレは突き刺さるんだ!!怖ッ

オレは恐怖しながらも、筭にブツ刺された物体を見つめる

(白い…何だろ?フワフワしてるっぽいし……それにだんだん赤く
…!?)

オレは絶句した

暗かった辺りにも目が慣れたのと、月の明かりで色の判別が出来る
ようになってたんだが、ソレによってもたらされた現実

突き刺さっている白い物が何なのかは判らないが、それが生き物で
赤く染まっっていく原因が『ソレ』から流れる血液であること理解した

同時に、彼女からオレの顔に落ちてきていた雫が『何なのか』を知
った

恐る恐る右手で自分の顔に付いた液体に触れ、改めてソレの正体を

確認した。色など無ければ良いのに、と祈るような気持ちで見たが、見事に打ち砕かれた

「滴れてくるほどって…」

オレは半ば呆れた様に呟くがメイドは反応しなかった

こんな淡々としているオレだったが、この時はもう既に限界だったんだ

彼女は怪我をしている様子はなく、なのに美しい顔は赤く穢れていた

それでも本能が一生懸命否定する

「おい。」

「はい？」

無機質な返事。メイドは未だ人形のように無表情だ。むしろ、人形の方がどれほどマシか

思わず溜め息

話したくもないが、ここは聞かなくちゃならない

「お前、怪我してんのか？」

「いいえ。どこも……光栄です。ご主人様」

お前の心配じゃねー！オレ自身の為じゃー！それに目が笑ってねーし！それが益々怖えーし。

ホントに光栄なんて思ってたのか、疑いたくなった

「（怪我をしているんじゃないかなかったならやっぱりアレは
『返り血』） ツツツ！」

自覚すると感情は一気に膨れ上がり覚醒する

止めようもない沸き上がる恐怖は全身を駆け巡り、堪らず絶叫へと変わる

「うつ… つ…わああ… んっ ぐっ …ふ!？」

しかし、ソレが響き渡る事はなかった

代わりに与えられたフワリとした甘い香りと柔らかくふつくらとした味わったことのない唇への感覚。

塞がれた所から漏れるのは吐息のみ、悲鳴は喉の奥に引っ込んでいた

ソレを自覚する頃、彼女の唇はオレから離れていた

キス……された？

メイドは茫然としているオレを見下ろし、先程までの表情が幻であったかのように再び笑顔だった

「（戻って…）」

上半身を起こすメイドは改めて微笑むと、スツと目を細め人差し指をオレの口元へ押し当てて囁く

「急に外へ飛び出してはいけません、危ないですよ」

いや、家の中にいたほうが数段危険だった気が……

メイドはオレの言い分を知ってか知らずか、説教らしき事を続ける

「…そして、外で騒いではご近所迷惑です。ご主人様？」

誰のせいだ！迷惑の根源に言われたくない

そう言った彼女の顔には…赤い血飛沫が整った彼女の表情を更に蠱惑的に魅せつける

その表情は人を惹き付けると同時に、惑わせ狂わせてもおかしくな
いと思った。それほどにオレは彼女に…

… 『脅えていた』

「ご主人様？」

ああ……声が遠くなる

なんか、マジで疲れた……

「……主人様ツ ……ご主人様！！！」

すっげー眠い。全部夢なら良いのに

ホント、とんだ誕生日だ

暗転 ……

メイドさん、どちらが本性なんですか？（後書き）

結局どうなる？！主人公の運命。……永遠に名無しなんですか？オ
レ

オレの日常を返してください！（前書き）

取り敢えず、まとまらないまま終話です

オレの日常を返してください！

ピピピピピ……

ハッ

「?!」

目覚まし時計の音と共に微睡む事もなく目を見開き、普段では考えられない寝起きの良さを見せて飛び起きたオレ

押し退けた掛け布団を確認し、部屋の窓から覗く日差しに平和な雀の囀りを聞く

「オレの…部屋？ 朝……」

状況が今一把握出来ないオレは啞然として自分の服装に首を傾げた

「オレ、いつ着替えたんだ？」

パジャマ姿のオレ。記憶が曖昧だった

「?」

暫く考える

…

段々意識がハッキリしてくる

「　　ッ！」

そして、不意に思い出す。あの異常な誕生日の様々な出来事を

オレは急いで部屋の壁とドアを振り返る。

メイドがハンマーで破壊したはずの『ソコ』は何の損傷もなく、見慣れた光景があった

「壊れて、ない……ゆ……夢……夢だったのかー!!」

オレは両手を挙げて歓喜の声をあげ、心から安堵する

「だよなっ　あんなコトあり得ない。オレもなかなかリアルな夢見るよなー……想像力豊かなのも問題ありだ」

オレは心機一転、晴れ晴れしい気持ちでベッドから飛び下りて、全身を伸ばして天井を仰ぐ

（まあ、あのメイドは美人だったし、夢だと解っていたならもう少し堪能してただけだな。残念）

今だからこんなくんだりない事言ってもらえたが、実際にあんな美女をリアルに拝めるか？と尋ねられたら、答えはNoだった。学校にだっていない、あんな美人

（良い気分も嫌な体験も今となっては全てが想像、夢物語だ。

……それにしたって、最後のはリアルに一番怖かったな……追い掛け回されていた方がまだ良かった。殺気みたいのがヒシヒシ感じてたし……）

思い出したら、また悪寒が全身を走る

(美人の無表情は化け物より迫力あるのだけは身を持って実感したけどな)

あの目が忘れられない

そんな事を考えながらパジャマから着替えようとボタンに手を掛けた……

「お目覚めですか？」

おはようございます、ご主人様」

ビクウツ

え？ そのイントネーションと声……何より

「『ご主人…様』？」

後ろからかけられた聞き覚えのある声に、オレはビシッと凍り付き緊張で息を止める。人物を確認する事を全身で拒絶する

「お着替えですか？お手伝いしましょう。ご主人様」

声の主は、硬直するオレの前に回り込み、目の前に立つのは声同様に見覚えのある美少女

……確かに改めて堪能したいと思ったさ、だけどこんな仕打ちあり！？

ポリウムあるボブショートの黒い髪に、白いレースリボンを揺らしながら、吸い込まれそうな瞳を上目遣いに向ける黒いメイド服の

「でっ…ドええええーッ！！（リアルメイドでター…！！？）」

まごうことなき例のメイドは現実に存在した

突如大声を張り上げてパニックしたが、メイドはそんな事に動じた様子もなくオレの姿にクスクス笑って言った

「ダイナミックな挨拶ですね！ご主人様。朝からお元気なのは素晴らしい事だと思います。素敵ですよ」

褒められちゃったよ。

「つか、オレのコレは挨拶じゃなくて悲鳴にならなかったオレの心の声、勿論君に対する恐怖だよ」

支離滅裂なオレの心理状態などお構いなしに、メイドは手早くオレのパジャマの釦を上から外していく。それに気づいたオレはまたしても悲鳴を上げる

「ひいひい！何してんでスカあッッ、アンタ…！！」

「改めまして申します。

私はご主人様に絶対なる忠誠を誓い、貴方から離れないことを誓います」

「は…はいつ？」

止めてくれ。幻聴が聞こえる

耳を塞ごうとするオレの上げ掛けた両手を、メイドはスルリと掴んでそれを許さない

「ッ…」

戸惑うオレに顔を近づけてくるメイド

ヤメテっ マジで綺麗な顔を近づけないで！怖いのと意識しまくりで頭がグチャグチャになる

メイドはしたたかな表情を変えないまま、お互いの顔に息が掛かるか掛からないか、という微妙な位置で囁いた

顔だけでも距離をおこうと無駄な努力をするオレ。
怖がっているくせに、男と言つのは悲しい性だ…
つい、反応してしまう

ううう……なんて情けない

そんな涙しそうなオレの手を更に強く握って色っぽい艶めかしい唇を動かしていく。その度に息が掛かって下半身がムズかゆくなる…

(泣)

「貴方と共に歩んで行ける事…これからを迎える事、その奇跡に感謝し、幸せを実感しております。」

この身に代えましても、私は貴方を永遠に御守り致します」

(有難い迷惑な話なので全力でお断り致します！)

…と、言いたかったが声にならなかった

メイドがゆっくりと離れる

彼女の熱を名残惜しく思う体をぶん殴ってやりたかった

メイドは改めてニコリと微笑んでみせる。今度は無邪気な子供っぽい笑顔にドキリとする

我ながら……いい加減にして、この節操なしな身体を恨めしく思う

だが、正直な所オレはこっちの顔のほうが好感を持てた

「ご主人様」

「な、何？」

あ、つい可愛い顔に釣られて返事をしてしまった

「誓いも立てた事ですし……」

ちよいと待て。それはソツチが勝手に…

オレの返答を待たずして、またしてもこのメイドはやらかしてくれ
る

……。ニコニコして背中から取り出したるは！！

「先立つてまずは、記憶を取り戻して戴きたいと…」

しおらしい態度で出現させたアイテム…いや、アレは既に武器と化
してるゾー！

「ひいつ」

思い出したくもない記憶が呼び起こされて無意識に硬直する体

ハンマー登場

「んぎゃああああ…！」

メイドはハンマーを軽々担ぎ上げた。だからその細腕は幻かい？

「私、頑張ります。決してめげません！」

（頼むからめげてください！どうかこの通り！！）

もう、必死だ

(忘れてくださいっ 諦めてー!!)

ああ神様、女神様…アキバのメイドさま。もう、とにかく何でも良
いから、この際贅言いません。
誰でも良い!

オレ、マジ死ぬ……マジでヤラれる。

でも、せめてオレのこの些細な願いを叶えてください、聞いてくだ
さい!

滲み寄るメイド、後退するオレ

「ギャー!! やっぱ死にたくなーいッ!
オレの平穏な日々、カムバーク!!」

メイドのせいでは、オレの日常は異常に変わる

オレの日常を返してください！（後書き）

続編（？）に、続く！…かも？！んー…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7272e/>

オレとメイドと異常な日常

2010年10月15日21時03分発行